

---

# 硬派な彼女

Satch

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

硬派な彼女

### 【Nコード】

N3631L

### 【作者名】

Satch

### 【あらすじ】

好きになつたのは硬派な女の子だった！？

みんなの前では硬派、でも2人きりになると甘えてくる彼女。そんな2つの顔を持つ彼女と俺のあまあまストーリーです。

第1話：ストーカーじゃない！（前書き）

硬派というよりツンデレかも。

この2つの違いが良く分からないんですけどね（笑）

## 第1話：ストーカーじゃない！

俺には高校入学当初から気になっている女子がいる。

その娘は綺麗なロングの黒髪で、推定150cmくらいの身長。まあ、はつきり言っただけ。そして中学生にしか見えない。

美人というよりもかわいい顔立ちで、校内でもトップクラスではないだろうか？

キョートな見た目と違い、休み時間などは常に1人で読書をしている。

暗いとかそういうのとは違って、なんと叫ぶか硬派？な感じ。

笑った顔を見たことないことからクラスでも少し怖がられている。

でもある時、俺は見ちゃったんだ、子犬を抱き上げて優しく笑う彼女を。

その笑顔がめっちゃめっちゃかわいくて、その瞬間恋に落ちたって感じ？

3

「はあ、美咲ちゃん、今日もかわいい…」

「おい、ストーカー」

「そうそう、俺は美咲ちゃんに付きまとうストーカー…って誰がストーカーじゃ！」

声をかけて来たのは親友？の三浦和利だった。

「なんで疑問符付きなんだよ！ それより豊、あの娘は止めとけて」

「なんでだよ！」

「なんか告つてきた奴をボコボコにしたとか、10人对1人で喧嘩して勝ったとかって噂だぜ？」

「ただの噂だろ？ 誰かが好き勝手言ってるだけだつて、そんなの」

「そうか？ ま、お前がフラれるの楽しみにしてるからよ！」

「すんな！」

まったくあいつは何しに来たんだ？

まあいいや、絶対美咲ちゃんを落としてあいつを驚かせてやる！

そんなこんなで帰りのホームルームも終わり、皆、帰り始めると、俺の計画も開始となる。

その計画とは、『美咲ちゃんのお家を見に行くぞ！』だ。

やっぱりストーリーカーじゃんって？ 違う！ 断じて違う！ お家が見ただけという純粋な気持ちです。

「おい、竹田、ブツブツ言っていないでとつとと帰れ」

俺の思考を邪魔してきたのは、担任のゴリ山。本名栗山だけど、まあ見た目がゴリラみたいだからゴリ山と呼ばれている。

「はぁーい、せんせ（はあと）」

「きもっ！…！」

「かわいい生徒にそれはないでしょう」

「もういいから帰れ…！」

「へいへい」

ってそんなこと言ってるうちに美崎ちゃんを見失ったじゃないか！  
急いでカバンを抱えて昇降口に行くと、上履きから革靴に履き替えている美崎ちゃんを発見！

ま、まにあつたー。

「さ、さようならー」

思い切つて声をかけてみると、チラつとこちらを見ただけで何も言わずに行つてしまった。

何か少し警戒しているような目だったな。でも、めっちゃかわいい。また見失わないうちに俺も革靴に履き替えて美崎ちゃんを追う。

電車通勤のやつは駅まで同じ道を歩くので問題なく駅に到着、

美崎ちゃんの家は、俺の家とは逆方向のようだ。

前もつてお金をチャージしてあるので定期券でそのまま改札を抜け、ホームへの階段を上がっていく彼女を追う。

電車を待つ彼女の位置からちょうど一両分くらい離れたところで電

車をまっつていると、

5分ほどして電車がやってきた。

隣の車両に乗る彼女を確認してから俺も電車に乗る。

彼女が確認できる位置まで移動すると程なくして静かに電車が動き始めた。

なんか本当にストーカーみたいだな俺…。

4駅ほど通貨したところで彼女がドアのほうへ移動するのが見えた。次で降りるみたいだな。

次の駅で彼女が降りたのを確認して俺も降りると困ったことに気が付いた。

この駅は改札に行くのに彼女のほうの車両ではなく、こちらの車両側の階段を使わなければならず、俺のほう彼女の前にいることになってしまった。

乗り換えの駅ではないので、別の電車を待つこともできず、仕方なく改札に向かう俺。

振り返って彼女を見るとバレる可能性があるのですが、そのまま改札を抜けて定期券を買う振りをして、切符売り場に向かうと、俺の後ろを彼女の長く綺麗な髪が通り抜けていった。

ここから自転車だったらどうしよう…という心配もあったけど。自転車置き場と思われるほうに行かないので歩きだということが分

かる。

「よかった…」

しばらく歩いていると閑静な住宅街になってきて、今、振り返られたら確実にバレる！

なんて思っていると彼女は信号のない十字路を曲がった。

見失うといけないので少し急いで俺も十字路を曲がると、仁王立ちの彼女が居た…。

「うわっ!?!? びっくりした!?!?」

「ストーカー…!」

「ち、違うよ、お、俺ん家もこっちなんだよ…!」

く、苦しい! 我ながらこの言い訳は無いよな…!。

「嘘だ、ずっと後つけてた…!」

「うぐっ!?!?」

ま、まずい! 気付かれていた…! どうしよう。  
ここは素直に謝ったほうがいいかもな。

「し、ごめん、でもストーカーじゃないから!」

「変態…!」



「変態でも無いし！」

「鬼畜……」

どンドン酷くなっ行って行くよ、これ。

「同じクラスの竹田豊だよ！」

「……」

「……知ってる」

間が空いたよ……ひょっとして俺、クラスメイトとして認識されてない！？

さっきさよならの挨拶したのに、覚えてないのか！

「今度、後つけて来たら、殴る！」

そう言うと彼女はクルッと背を向けて歩いていく。

「ちょ、ちょっと待って！」

彼女はピタリと足を止めると振り向きもしないで返事を返す。

「……何？」

「えっと……何て言うか、その……」

「……用がないなら、呼び止めるな」

「あ、待ってよ」

「…だから何？」

「あの俺…君が好きなんだ！」

「…っ！？」

うわっ！ 俺なにいきなり告ってんだよ！

「い、いきなり、何を言うー！」

あれ、なんか動揺してない？ もしかしてコレは脈あり！？

「か、帰るー！」

彼女の前に回って呼び止める。

「ねえちょっと待ってよ」

「うるさいー！」

「いだあー！」

カバンが顔面直撃したし…鼻血出てない？

「…ちょっとだけ話ししよっよ」

「…さあさあ…」

そう言うと彼女はダッシュで走って行ってしまった。

でも美崎ちゃんの顔が少し赤くなっていたのは俺の見間違いだったのか！？

第2話・美咲ちゃん家へGO！前編（前書き）

サブタイトルを修正しました。

## 第2話：美咲ちゃん家へGO！前編

「美咲ちゃんまだかなー？」

学校の最寄駅の改札で、美咲ちゃんが登校してくるのを待っている。流石に美咲ちゃん家の最寄り駅じゃ、今度こそ嫌われてしますかも知れないしね。

「おーい、豊？」

「おう、和利か」

嫌なタイミングで声をかけてきた親友に軽く手をあげて応える。

「何やってんだ？」

「ん？ ちよつとな…」

「また、ストーカーか？」

「ストーカーじゃねーし！ ……それで『また』って何だよ！」

「まあ、通報されねーように気を付けるよ、変態」

「変態…は否定しないが？」

「しないのかよー！」

「それよりお前さっさと学校行け！」

手で追い払うような仕草をすると和利は

「馬に蹴られればいい」と捨て台詞を吐いて去って行った。

「蹴られねーし、っていうかその辺に馬は居ないだろが…」

「っていうか美咲ちゃんおせーな」

とつぶやいて改札を見た瞬間、美咲ちゃんを発見！

同じ制服の群れから美咲ちゃんを一瞬で発見するなんて運命？

「おはよー!」

「…」

美咲ちゃんは俺の姿を認めると、何も言わずに素通りしていく…。

「無視!？」

まあ、予測の範囲内だけど、ここまで予想通りだと少しメゲそうになります。

「ねえねえ、待ってよ美咲ちゃん!」

「…慣れ慣れしく名前で呼ぶな」

やはり睨んだ顔もかわいい、っていうか睨んでる風に見えないんだけど。

「一緒に学校行こうよ!」

「…馬に蹴られればいい」

ちよっ…え？ それって今、流行ってるんですか？

「ね！ カバン持ってあげるよ」

「うるさい…」

「あぶっ！」

美咲ちゃんカバンが俺の顔スレスレを通っていった。

「…その場しのぎで、告白する奴なんて信用できない」

「あー…アレねー」

「…」

「いやなんつーか、自分でも後になって恥ずかしくなってる」

「恥ずかしい…」

「あ、いや、そういう意味じゃなくってね」

「…？」

「いつかは告白するつもりだったけど、あのタイミングでするとは自分でもびっくりでね」

もう告白しちゃったもんは事実として受け止めないとね。

「え…？」

なぜか美咲ちゃんはきよとんとした顔している。

「だから、告白自体はその場しのぎじゃなく、本気なの、分かる？」

すると美咲ちゃんの顔がだんだん赤くなって来たように見えた。

その瞬間「…先行く」と言って突然走り出した。

「ねえ、今顔赤くなってなかった？」

走り去る背中にその声をかける。

「別になってない」

「えー？」

「なってない！」

確かに美咲ちゃんの顔は赤くなっていたと思う。

単純に照れているだけなのか、それとも…？

昼休み美咲ちゃんの前の席が空いていたので、後ろ向きで座ってみる。

本に夢中で俺に気づかない、ついかどんだけ熱心に読んでいるの？



どんな内容の本を読んでいるのか気になったので、ちょっと覗き込んだ時、  
ようやく美咲ちゃんが顔を上げた。

「…!？」

その距離、数センチ。

アップでみる美咲ちゃんは、反則的にかわいい。

「いきなり何をする!」

「いだあ!」

いきなりグーでパンチ食らいましたよ!

えつと…

「それは俺の台詞だと思っけど…?」

「いきなりキスしようとした」

「はあ!？ 教室でそんなことするかあ!」

「それもそうか…」

なにやら美咲ちゃんはブツブツ言っている。

「え?」

「…」

「あぶっ！」

今度はギリギリで避けた。

「避けるな！」

「ええ！？ そんなむちゃな！」

「…馬に踏まれればいい」

ええ！？ 蹴られたあと踏まれるってこと？  
つーか馬は確定なのかな…。

その時、午後の授業開始の予鈴が鳴った。

「じゃあ、美咲ちゃん、今日一緒に帰ろうね！」

「…」

「照れちゃって」

「照れてない…馬になればいい」

馬になる…えっと、それどういう状況なんですか、ってもういや疲れた。

帰りのホームルームも終わり、美咲ちゃんの席を見たら、もういい！

ホームルーム終わってまだ数秒だよ？　どんだけダッシュしたんだあ！

とはいえ女子の足だし、特に美咲ちゃんはちっさいのでダッシュすれば追いつくだろう。

ダッシュで下駄箱に向かうと案の定、ローファーに履き替える美咲ちゃん発見！

「おまたせ！」

「…待つてない」

だよねー。

美咲ちゃんは渋々といった感じでローファーに履き替えるのを待つてくれている。

なんか彼氏を待つ彼女みたいでこっぴどいね。

「ねえ美咲ちゃんは彼氏いるの？」

「…」

駅へ向かいながら確認のために聞いてみたけど、華麗にスルーされました…。

駅に着くと「じゃあ」と言って、美咲ちゃんは自宅に帰る電車のホームに歩いていく。

当然俺も着いていき一緒に電車に乗る。

「…!? なぜ着いてくる…」

「つーか、気付くの遅!」

「…あんた逆方向」

「うん、まあ、逆…かな?」

「はあ…」

そんな大きなため息つかなくても、ん? あれ?

「っていつかなんで逆方向って知ってるの?」

「知らない」

「でもはつきり逆方向って言ってたけど?」

「知らない!」

ぷいっとそっぽを向いてしまったけど、そんな表情もかわいいね!

でもなんで俺の家が逆方向だって知ってたんだろ? まさか!

美咲ちゃんも俺のこと!?

なーんてあるわけ無いよね、今までそんな素振りすら見たこと無かつたし、

たぶん電車に乗ってるところかホームにいるところでも見たんだろ  
う。

「へへへ」

「…キモイ」

少なからず美咲ちゃんが、俺のことを知っていてくれたことが嬉しくて、ついニヤけてしまった。

「いやなんか嬉しくてさ」

「バカ？」

「そうそう俺バカだから…ってバカじゃねえ！？」

第2話・美咲ちゃん家へGO！前編（後書き）

少しはクールになったか…

### 第3話・美咲ちゃん家へGO！後編

「…いつまで憑いて来る」

「それ字違っし！俺、超生きてるし！」

「どっつてもいい…」

えっと…泣いていいですか？

「…どこまでついて来る」

電車を降りてもついてくる俺に少し不機嫌そうに問いかけてきた。

「それは、美咲ちゃんの家までだけど？」

「…」

え？ 無視！？ 自分から聞いといて無視！？

…

「え！？ ここが美咲ちゃん家？ でけえ…」

門が大きくて玄関前には車が止められている、そんな豪邸が目の前に広がっている。

「…そこは隣」

「え？ あ…あはは」

美咲ちゃんがお嬢様っていう妄想が先行して勝手にこの家だと思っ  
込んだよ。

「へー」か…」

まあごく一般的な2階建ての一軒家だった。

「何が言いたい？」

「いえなにも…ってかさっきの家がデカ過ぎだ！」

「あの家と比べるな」

「うん」

美咲ちゃんは門を開けて振り返った。

「…それじゃ、さよなら」

「ええ！？ ちょっと待ってよ」

「…何？」

いかにもめんどくさいと言った感じで聞き返す。

「何って…美咲ちゃんの部屋見たいなーって」

「…」



ちよつと嫌な顔しているけどさ、本当に家見てバイバイだと思っただのか!？  
つてか変なことしようとか思ってるわけじゃないよ？

純粹にもつと話しをしたいなーつて、美咲ちゃんは外だと自分を抑えている感じがするんだよね。

美咲ちゃんの部屋なら他に誰も居ないし、本当の彼女が見られるんじゃないかと、そんな感じですよ。  
つて俺、誰に話してる？

「あら、美咲帰ったの？」

その時ドアが開いて、美咲ちゃんに似ている綺麗な女性が顔を出した。お姉さん？

「あ、お母さん」

「!?!」

美咲ちゃんのお母さんだった!？

「あらあら、お母さんなんて何年ぶりに呼ばれたかしら？ いつもはママなの」

「…」

みるみるうちに美咲ちゃんの顔が真っ赤になっていく。  
まあママって呼ぶのは想定内だから気にしなくていいのに。

「あらそちらの方はどなた？」

「通りすがりのバカ」

通りすがりのバカってどんなやねん！

「こ、こんにちは、あの俺、竹田豊って言います、美咲ちゃんのクラスメイトです、今は」

「『今は』ってところが意味深ね」

と美咲ちゃんのお母さんは俺にウィンクした。色っぽい…。

ポーンと見てたら、何故か美咲ちゃんが睨んでました…俺、何かしたかしら？

「まあ、ここじゃなんだし、あがんなさい」

「はい！」

「ちょっとお母さん！ あんたも即答すんな！」

そりゃ即答もしますよ、それが今回の大きな目的だしね。

…

「へえ、ここが美咲ちゃんの部屋かー」

玄関脇の階段を上った2階の部屋の1つが美咲ちゃんの部屋。明るい色調をベースにされていて、ぬいぐるみとかもあり女の子らし

い部屋だった。

「…変態」

「ええ！？」

確かに今ニヤニヤしてたけどさ、いきなり変態って…いやまちがっちゃいないけどさ。

「ここは開けたらダメなんだからね」

美咲ちゃんは小さな手をいっぱいに広げてダンスの前に立った。まあおそらく下着とか入ってるんだろうけどバレバレだよな？ 見たいのはやまやまだけど、それはまた今度見るからいいや。

「美咲ー、紅茶いれたから持って行きなさい」

「…開けたら殺す！」

そう言い残して美咲ちゃんは部屋を出て行った。

「こえー…」

あのダンスじゃなければ開けてもいいんだよね？

勉強机の引き出しを開けてみる、シャーペンとか消しゴムがいっぱい入ってる。

なんでこんなに入ってるんだろう？ 集めるのが趣味なのかな？ 別の引き出しを開けると1枚の写真が目に入った。

それを手に取ろうとした瞬間、ドアが開いて美咲ちゃんが戻ってきた。

「あ！ 開けるなって言ったでしょ！」

「え？ だってあのダンスは開けてないよ？」

「そういう問題じゃない！」

「ええ！？」

「しかも本人に見られるなんて……」

「ん？」

「あの写真は別になんでもないの！」

美咲ちゃんは涙目で何を言っているんだろう？

「べ、別にあんたを写そうと思って撮ったんじゃないんだから！」

なにこの基本的なツンデレ口調……あの写真には俺が写ってるの？

どんな写真か気になって来た。

美咲ちゃんがちょっと涙をぬぐった隙に、写真を手に取った。

それは俺が友達と談笑していると思われる写真で、俺しか写ってない！

っていつかはつきり俺だけを写してるじゃん！

「あ！ くら！ 何度も見るな！」

「何時撮ったんだあ！　こんな写真！？」

「え？」

「全然気付かなかった…」

「も、もしかして今初めて見たの？」

「うん」

「…！？」

美咲ちゃんは両手で顔を隠してしゃがみこんでしまった。

えっと…さつきから美咲ちゃんの影響が変わっていくんですが何コレ？

しばらくすると真っ赤な顔の美咲ちゃんは立ち上がって言い放つ。

「そうよ、ゆた…あんたを撮った写真よ！　文句ある？」

「…いえ、ありません」

何故に逆ギレ？

「文句はないけど、何故俺の写真を？」

「うぐっ！　そ、それは…」

「それは美咲が豊が好きだからだよ」

「ええ！？ 美咲ちゃんが俺を？ って和利！？ なんでここに…？」

何故、和利がここに？ もしかして美咲ちゃんと付き合ってる？

「ん？ ああ、俺と美咲とは幼馴染なんだ」

「そうか幼馴染か…って、ええ！？」

何よそれ何なのよーって、おねえ言葉になっちゃうよ！

「ちょ…おまつ、そんなこと一言も…」

「うん、面白そうだから黙ってた」

「面白そうだからって…」

そうだった、こいつは前からそんな性格だった。

「それと美咲とは小さい頃から一緒に、兄妹にしか思えないから気にしなくていいぞ」

「分かった…っていつかさっきのは本当のことか？」

「幼馴染か？」

「違う！ その前の…その」

「ああ、美咲が豊を好きって話だろ？」

「う、うん」

「それは美咲本人から聞いたほうがいいんじゃないか？」

「そうだけど、って美咲ちゃんはどこに？」

「ああ、それならあそこだろう」

和利が指差したのは白い洋服ダンスだった。

「ま、まさか…」

「美咲は都合が悪くなると決まってあそこに入るんだよ」

「美咲ちゃんがこんなところに…：…居た！」

洋服ダンスを開けると、美咲ちゃんは向こう向きで体育座りをして  
いた。

そっと肩に触れるとビクッと大きく飛び上がった。

「ひゃあ！」

洋服ダンス開けられた時点で気付けー！

「美咲？ 豊に告られたんだろ？」

「…うん」

洋服ダンスに入ったまま返事する美咲ちゃん。って叱られた子供か！

「それなら、ちゃんと応えてやれ」

「う…うん」

そろそろと洋服ダンスから出てくる美咲ちゃん。

出てくる時、少しめくれたスカートから伸びた太ももが見えて、ドキッとすると、

そして少しだけ白いものがチラッと見えたけど、ここは黙っとこつ。

「あ、あの…」

美咲ちゃんはモジモジとしながら何かを言おうとして和利を見た。

「ん？ じゃあ後は若い2人でって事で、老兵は立ち去ります」

「お前同級生だろが!？」

和利が出て行くとシンと静まり返った部屋と、ガチガチに緊張した美咲ちゃんが居た。

「あ、あの…ゆ、ゆたかくん…?」

「お、おう」

ゆたかくんなんて呼ばれると、なんかくすぐつたい。

「わ、わたしも…ね」



「う、うん」

「その…」

「…」

「ゆ、ゆたかくんが好き…」

「や、やったあ！ いだあ！」

感激のあまり抱きつこうとして、思いきりビンタくらいました！

よくよく考えたら、ここって和利ん家の近くじゃん！

そうか！ 和利ん家から帰るときに美咲ちゃんを見たんだ。

「でも、どうして俺を？ 美咲ちゃんとは接点が無かったと思うけど」

「それは、子犬を抱き上げてすごく優しい顔してたから…」

俺が美咲ちゃんに惹かれたのと一緒に！

#### 第4話：今度は俺ん家へGO!?

昼休み、購買で買ったパンを持って美咲ちゃんの席に向かう。

「美咲ちゃん、一緒にお昼食べよう?」

「…うん」

美咲ちゃんは身体の大きさに比例してか、えらく小さい弁当箱を開けた。

「それ、お母さんが作ったの?」

「ううん、自分で作った」

ちよつとだけ自慢気に、ない胸を反らしている。

「えっ!?! まじで?」

「…驚きすぎ」

「ああ、ごめんごめん、想定外だったから…」

「むう」

美咲ちゃんは少しだけ頬を膨らませている。

「そのウィンナー美味しそうだね」

「美味しい」

「うん、そのウィンナー美味しそうだなあ」

「だから美味しい」

だめか…「はい、あーん」とか期待してたけど、まだ早い？

「頂き！」

ウィンナーを素早く摘みあげて口に放り込んだ。

「あっ！ くらー！」

思わず大きい声をだして、周りを気にする美咲ちゃん。周りの人もいつもと違う美咲ちゃんに戸惑っている。

そして「あの2人…」とか話しているのが聞こえてくるが、こうなることは分かっていたので、気にしないことにする。

「う、うめえ！」

「…」

美咲ちゃんは何も言わないけど嬉しそうな顔をしている。

「ね、今度俺のも作ってよ」

「…なんで竹田のまで作らないといけないの？」

「いいじゃんか、けちー、けちー、あ…ごめんなさい」

美咲ちゃんがこぶしを握り締めるのが見えたので、先制して謝っておく。

「はぁ…気が向いたらね」

「やったあ！」

…

放課後、美咲ちゃんと学校から駅に向かって歩いていると、唐突に言い出した。

「ね、今日はゆたかくん家を見てみたいな」

「え？ 俺ん家来ても面白いもの無いよ？」

「面白いか面白くないかは私が決めるの！」

「はいはい、お姫様」

「じゃあ決まりね、はい！」

美咲ちゃんは手を前方に突き出して、どうしたんだろう？

「ん？」

「もう！ ほら」

えっと…手の甲にキス？ な訳無いよね。

「つなげ！」

「え？ 手つないでいいの？」

「うん」

恐る恐る美咲ちゃんと手をつなぐ、や、やわらかー。

まだ駅に着いてないが、こんなところで手をつないで歩いていたら何言われるやら……。

「その君、小学生を連れてどこに行く？」

「違います、この娘はこう見えて……って和利かい！」

慌てて言い訳しようとしたら、ニヤニヤした和利だった。

「お二人さん、手なんかつないでどこ行くんだ？」

「どこって俺ん家だけど？」

「なに！？ おまえらもうそんな仲になったのか？」

「どんな仲だか知らないけど、美咲ちゃんが俺ん家見たいっていうからさ」

「ふーん、そうか」

反応、薄！

「美咲を泣かせんなよ」

「分かってるよ」

「じゃあな、美咲もまたな」

「うん、バイバイ」

和利は軽く手を上げて去っていった。

「なんだっただあいつは…」

「そんなことより、こう見えてって何？」

「え？」

美咲ちゃんは30センチくらい前に立って俺を見上げてくるから、このままキスでもしてしまいそうだ。

「この娘はこう見えてって言った」

「えっと…こんなにかわいく見えてって意味だよ」

「ふーん…」

少し納得が行かないと感じの美咲ちゃん。

「そ、それより早く行こう」

「うん！」

あぶねえ！ なんとかごまかしきつたよ、神様！

「お家着いたら、お仕置きだからね」

ぎゃー！ ごまかしきれてなかったよ、神様！  
ってか、お仕置きって何されるんだろっ…。

…

「……？」

「そっだよ」

「へえ、意外と大きいんだ？」

「借家だけどね、どうぞ」

玄関のドアを開けて美咲ちゃんを招き入れる。

「ただいまー」

「おかえり、って、あら？」

俺の母さんは美咲ちゃんを見るとちよつと意外な顔をした。

「彼女、美咲ちゃんだよ」

「…黒崎美咲と言います」

「豊、まさかこんな小さな子を誘拐…」

「違うから！ 同級生だから！ っていうか同じ学校の制服着てるじゃん！」

「いらっしやい美咲ちゃん、あがって」

って無視かい！

「…お、おじやまします」

「美咲ちゃんこっちだよ」

「うん」

美咲ちゃんを階段に案内しようとしたときに母さんから呼び止められた。

「豊」

「ん、なに？ 母さん」

「ジュースとお菓子あるけど、30分くらいしてから持ってったほうがいいかい？」

「なんでだよ！」

「取り込み中だったらと思って」



「まだ、そんな関係じゃないから！」

「そう、『まだ』ね」

「うぐっ、す、すぐ持ってきてよ」

「はいはい」

高校生の息子にそんな気を使うなんてどんな親だよ！

「美咲さんその階段あがっていいよ」

ちょうど階段の前で待っていた美咲ちゃんに声をかける。

「うん」

俺もその後が続いて階段をあがっていくと、スカートが短いから見えそうだし！  
言うべきか黙っておくべきか男なら誰でも葛藤するこの難題をどうしよう？

「えっち……」

「っ！？ 見えてないから！」

「え？ あ！」

慌ててスカートを押さえる美咲ちゃん。

「…」

ジト目で睨まないでよ、本当に見えてないんだってば！

「そ、それより、なにがえっち？」

「ゆたかくんがえっち」

「だから見えてないって！」

「違う…あれ…」

「あー！」

今度は俺が慌てる番だった、階段をあがった先の突き当たりの部屋が俺の部屋だけど、

ドアが開いていて、ベッドの上に出っぴばなしになってるエロ本が見えていた。

慌てて部屋に駆け込みベッドの下にエロ本を隠す。

「あ、あはは…」

「…」

「いや警戒しなくても大丈夫だから！」

「…じ、じ…」

恐る恐るといった感じで俺の部屋に入ってくると、きよるきよると見回す美咲ちゃん。

うん、探してももうエロ本は無いよ？

「俺の部屋に入ったの美咲ちゃんが初めてだよ」

「嘘だあ」

「ほんとだって、ほかには隣の小学生の女の子くらいだよ」

「初めてじゃないじゃん…」

「いや、彼女では初めてだから」

「…彼女」

美咲ちゃんは恥ずかしそうに赤くなって見つめるから、俺もなんだか照れてしまう。

二人でもじもじと見詰め合っていると、突然母さんが顔を出した。

「やっぱり、お邪魔だったかい？」

「うお！」「きゃあ！」

母さんが急に顔を出すから二人とも飛び上がるほどびっくりした。

「母さん！ 大丈夫だから！」

「はい、ジュースとお菓子」

そういつてジュースとお菓子の乗った盆を俺に手渡した。

「じゅっくりー、なんだったら泊まってく？」

「泊まらないから！ もう出てってよ母さん！」

「はいはい」

渋々という感じで母さんは部屋から出て行った。

「面白いもの無いね」

「だから面白くないよって言ったじゃん」

「つまんない！」

ええ！？ 普通そんなに面白いものって置いてないよね？

「わ、わたしの写真くらい出てきてもいいのに！」

ああ、そういう面白いのね、確かにそれは置いてないな。

「だって、いきなり写真なんて撮れないし……」

「…：そうだね、わたしには和くん（和利）っていう協力者が居たしね」

ご機嫌が直ったようで何よりですよ、お姫様。

それからしばらく話をしたりゲームをしたりして楽しい時間を過ごした。

「じゃあ、お待ちかねのお置ききタイムにしようか」

「え!？」

すっかり忘れてた!　っていつか神様も忘れてた。

「目を瞑って」

ええ!？　パンチですか？　キックですか？　肅清ですか？

ふいにいい香りがしたかと思ったら、おでこに柔らかい感触がした。

目を開けるとおでこに唇を付けている美咲ちゃんがいた。

「!？」

「あ、こら、目開けるな」

抗議する美咲ちゃんだけど、その顔は真っ赤っかだった。

「もう一回!」

「だーめ、もう帰らなきゃ」

「え？　まだいいじゃん、ご飯食べていきなよ」

「ごめんね、ママが待ってるし」

「そっかぁ…あのお母さん待たせたら悪いしね」

美咲ちゃんに似ててっつていうか美咲ちゃんが似てるんだけど、あの色っぽいお母さんを思い浮かべてボーっとしてたら足踏まれました！

「いでっ！」

「ぶい」

いや、自分でぶいって言うてそっぽ向く人初めて見たよ！

「美咲が一番だよ」

呼び捨てにしてみました、俺の顔たぶん真っ赤です。

「よ、呼び捨てにすんな！」

美咲ちゃんも照れて真っ赤になってます。

「じ、じゃあ送っていくよ」

「う、うん」

美咲ちゃんと2人で階段を降りて玄関に向かうと母さんが顔を出した。

「あら、美咲ちゃんもう帰るのかい？」

「…おじやました」

美咲ちゃんはぺこりと小さくお辞儀をした。

「母さん美咲ちゃん家まで送ってくるから」

「そのまま泊まってくるのかい？」

「なんでだよ！ 帰ってくるよ」

「泊まる……」

美咲ちゃんも赤くなってないで否定してくれ！

## 第5話：宣戦布告、前編

「ちょ…ゆたかくん？」

「美咲ちゃん…」

そつと美咲ちゃんを引き寄せ、抱きしめてみる。

「だ、だめだよ、ね、起きて？」

「大丈夫、大丈夫」

つていうか俺、寝てないから！

「だ、だめつてば！」

「大丈夫だから…ね？」

「あつ…やつ…」

「美咲…」

「いいかげん起きろ！」

「いだあ！」

脳が揺れるような衝撃で目が醒めた。

「夢か…つてか寝てた！」



「…」

「あれ、美咲ちゃん!？」

腕を組んで真っ赤な顔をした美咲ちゃんが、ジト目で睨んでいた。

「ど、どうしたの？」

「それより、何か言うことあるよね?。」

美咲ちゃんに襟を掴まれてグイッと引き寄せられる。  
か、顔近い!

「え? いらっしやい…?。」

「違う!。」

「…」

「…」

「えっと…今日もかわいいね」

「…あ、ありがとう、ってごまかすな!。」

あの一…ごまかすって何のことでしょう?。

「ごめんなさいは?。」

「うん、ごめんなさい」

「って、え？　なんで俺怒られてるの？」

「っていつか俺なんかした？」

「…はあ」

「はい、ため息いただきました！」

「あのー俺…いや僕何かしましたでしょうか？」

「覚えてないの？」

「ジト目から半眼に変わってきました！」

「うん、まあ」

「だ、抱きしめられた、それから…」

「俺が美咲ちゃんを抱きしめた？」

「あー！」

「思い出した？」

「うん、抱きしめたところまでは覚えてる…けど、その後何かしたっけ？」

「何故か顔を赤らめる美咲ちゃんは超絶かわいいっス！」

「教えない！」

「なんで!?!」

「胸に手を当てて考える！」

「えっ!?! いいの?」

美咲ちゃんの胸を触ろうとする手を弾かれた!

「いたっ!」

「自分の!」

「あ、ああ、自分のね……」

「また触られるところだった……」

ん? また触られる……?

「もしかして俺……む、胸を触った?」

「触ったというか、も、も……」

さらに顔を赤らめる美咲ちゃん。

「も?」

「も、もま、揉ま……ゆたかくんのエッチ!」

「いだあ！」

本日2度目のパンチが俺の脳を揺らした。でも美咲ちゃんの胸は揺れなかった。

「もっかい殴りたい？」

心読まれた！？

「そ、それより美咲ちゃん今日はどうしたの？」

「だって今日はデートだよ？」

「うん、それは分かってるけどまだ早くない？」

チラッと時計を見るとまだ8時だった。

待ち合わせは11時なのに…

「それに、待ち合わせは駅前だったよね？」

「そ、そっだよ」

何故か美咲ちゃんはあたふたしだした。

「じゃあどうして」

「だって早く…っただもん」

「え？ ごめん途中聞こえなかった」

いやあのね、ぷうつと頬膨らまされても聞こえなかったんだからし  
ようがないよね？」

「だ、だって早く会いたかったんだもん！」

「…」

「ゆ、ゆたかくん？ め、迷惑だった…かな？」

「美咲ちゃん大好き！」

「きゃあ！」

めっちゃめっちゃ嬉しくて、めっちゃめっちゃかわいくて、思わず抱きつい  
ちやいました。

「あ、ごめん!？」

殴られる前に体を離すと、まっかな顔をした彼女はキョトンとして  
いる。

「迷惑なんてとんでもない、めっちゃ嬉しかったよ！」

「そ、そっか…」

「…」

「…」

二人で見つめ合うこと数分

「にーちゃん、この部屋暑くない?」

「うおー!」

「きゃあ!」

「ちょ…カナ…いつからいた?」

急に登場したこいつは隣の家の女の子で、ちよくちよく家に遊びにくる。

歳は10歳で長い髪を結わってツインテールにしている。

「んー? 早く会いたかったんだもんのあたり?」

「ぐふっ…」

い、一番見られたくないところからかよ!

「ゆたかくんの妹さん?」

美咲ちゃんは俺の腕を軽く掴んで、見上げてきた。

「あ、こいつは隣の家のカナ、よく遊びに来るんだ」

「ふーん…」

「にーちゃん、この娘どこの小学校? カナの学校にはいないけど」

「し、小学校…」



## 第6話：宣戦布告、後編

「なっ！？ わ、わたしだってゆたかくんをあんたになんか渡さないんだから！」

ピシッとカナに向けて指を指してますが、大人気ない…けど、ちょっと嬉しい。

「おい、カナ！ 美咲ちゃんは俺の彼女だぞ」

「なっ！？ にーちゃんロリコンだったのか？」

ちげーよ、っていうか高校生って言ったの聞いてなかったのか？

「え！？ ゆたかくんロリコンだったの？」

「ち、ちがっ」

ロリコンではないけど、彼女が見た目小学生だから、そう思われても仕方ないのかな。

っていうかこの連携は何？ この2人本当に初対面か？

「カナは立派なれでいけど、ミサキチはロリじゃん？」

と無い胸を反らしている。

「誰がミサキチよ！？ って誰がロリよ！？ 17歳よ！ あんたこそレディも言えない幼女じゃないのよ！」



美咲ちゃんは目の端にうつすら涙を浮かべている。  
がんばれ美咲ちゃん！

「むう…にーちゃんはカナと結婚するんだぞ」

「えっ!?!」

えっ!?!?

「ちよつとゆたかくん…どういうこと!?!」

俺も初耳です。つーか怒りの矛先が俺に向きつつあるこの状況、どうしよう。

「えっと…カナさん何をおっしゃられているんですか?」

「にーちゃんが風邪で寝込んだ時、心配で見に来たカナの手を握りながら、結婚しようって言ったもん」

「手を握…」

ちよいと美咲さんそこに反応するのおかしいでしょ?  
でも、いや、ちよつと待てよ…

「言ったかもしれない…でも、あれは」

手違いというか人違いというか。

「…」

「美咲ちゃん…?」

美咲ちゃんは俯いて身体をわなわなと震わせていた。

「ゆたかくんのバカア!」

美咲ちゃんは階段をダダダと降りていき、すごい勢いで玄関から出て行った。

最後に玄関のドアがバタンと閉じると家全体が揺れた。気がした。

「…にーちゃん? バカとかアホとか甲斐性なしとか言われてたね」

「うん…いや、そこまで言われてねーよ!」

「ところでにーちゃん、結婚って何?」

ええ、そりゃもう盛大にずっこけしましたとも!

…

休み明け学校に来るのがこんなに憂鬱だったことがあっただろうか?

「ないな」

「ちよ…和利! 心読むな!」

登校中に悪友に見つかり更に憂鬱になった。

「美咲から聞いたぜ、喧嘩したんだって？」

「うん、まあ…。」

「おっと、助けを求めようとしてもダメだぜ、痴話喧嘩の仲裁はコメンだ」

痴話って…

「じ、自分でなんとかするよ…。」

「美咲はああみえて結構頑固だぜ、まあガンバレよ！」

「ああ」

朝から元気のいいやつめ、普段はここから一緒に登校するのに、作戦を考える時間をくれたということか？

作戦か…変に作戦など立てずに素直に謝ったほうがいいな。

…

「美咲ちゃん、おはよー」

「ぶい」

そっば向かれましたっていうか、ぶいってやっぱ自分でいうんだ…。

「ぷい」

美咲ちゃんが向いたほうに行くと、今度は逆方向にそっぽ向く。つていうかその効果音聞くと本気で怒っているのか疑問に思うよね？

でもどうすっかな、この姫の状態。

そろそろ1限目始まるし、ここは昼休みしかないな。

…

結局授業の合間の休み時間では、聞く耳すら持ってもらえなかった  
ので、

強行手段で逝きたいと、いや行きたいと思います。

昼休みに入ったと同時に美咲ちゃんのところに行き、そのままお姫  
様抱っこ。

「えっ！？ ちょ…なに？」

さすがの美咲ちゃんも面食らっているご様子です。

「ちゃんと訳を聞いて欲しいんだ、いいよね？」

「う、うん、わかったから、下ろして」

その返事を聞いて、お姫様抱っこのまま教室を出て屋上に向かう。

「おろしてえええー！」

「なんだなんだ？」

「ていうかあの娘あんなキャラだったか？」

教室では普段と違う美咲ちゃんに戸惑いの声が上がっていた。

…

「だからね美咲ちゃん？ カナに言ったことは、間違いなの」

「間違い？ 間違いで結婚なんて…言わない」

両腕を組んだ姿勢で、怪訝な顔をこちらに向ける。

「いや間違いというか人違いなの」

「人違い？ 誰と間違えたのよ！」

目の端には涙が浮かんでる。

「誰と…って」

美咲ちゃんって意外と鈍感？

「美咲ちゃんに決ってるじゃん？」

「…っ!？」

美咲ちゃんは一瞬で全身真っ赤になりました。  
いや全身を見たわけではないけどね！

「で、でも、なんで…あの子と間違っただの？」

「そ、それはもう別にいいんじゃない？」

全身からいやな汗が出てきてます。

「なんか怪しいな」

じーっと、ジト目で見てくる。

「あ、あや、怪しくねーし」

「んー？ 正直におねえさんに言っちゃいなさい」

美咲ちゃんは鼻先数センチのところまで顔を近づけてくる。  
顔近いつて！ っていうか、おねえさんって誰よ？

「あの時は風邪のせいで、意識が朦朧としていたわけなんですが」

「そんなことはどうでもいい」

「すみません…」

うう、この娘は弱み握ると、姫から女王様になるんですか？

「誰が女王様かー」

心まで読んでくる超人ですね。

「えっとですね、カナのシルエットがですね、美咲ちゃんに見えたわけなんですよ！」

「あの子のシルエット…小学生だよね、  
んで、その小学生のシルエットとー、わたしのシルエットを間違えたということは…」

「んじゃ、教室もどろっかなー…」

何か命の危険が近づいている気がするので、その場を立ち去ろうとするも

「…さて」

ええ、当然呼び止められましたね。

しかも地獄の底から響くような重低音です、みなさんお元気で！  
命があつたらまた会いましょう！ ぐすん…

ガコン！

「いだっああああ！」

第6話・宣戦布告、後編（後書き）

宣戦布告っていうほど恋愛バトルは無かったですね^^;



## 第7話：寝言（前書き）

今回は難産で、短めになっています。

もともと10話前後と考えていたので、

そろそろ完結に向かって書いて行く予定です。

## 第7話：寝言

それは午後の授業中のこと、極度の眠気に襲われてあくびをすると机に突っ伏してこつち向きに横を向いて寝ている美咲ちゃんが目に入った。

そこで俺はノートの端を破き、それを小さく丸める。

先生が黒板に向いた隙に、美咲ちゃん目掛けて投げると、おでこに命中！

「よし！」と心の中でガッツポーズと取ったとき、美咲ちゃんが少し身動きした。  
起きたか？

「ん、うーん、ダメ…」

ダメ？

「ダメだよたかくん…みんなが見てるよ」

「んなつ！？」

何いまの？ 寝言？ ゆたかくんって誰？ とクラス中が騒然となる。

その喧騒で俺の驚きの声は掻き消されたが…

「おい、豊あ、夢の中で美咲に何してんだ？」

と和利の野郎が、半笑いで俺に言って来た。

「なっ!?!」

クラス中の視線が一斉に俺に向いたので、俺は頭を抱えて机に突っ伏した。

和利の野郎…あとで覚えとけ!

そんな中でも先生は淡々と授業を進めていた。生徒に興味なしですか?

…

授業が終わると何かを察したのか、和利は脱兎の如く教室を逃げ出して行った。

「くっ! 和利はあとでもいいか…」

とりあえずまだ居眠りしている眠り姫に、お仕置きしないと!

美咲ちゃんの傍に行き肩を少し押してみる。

「ふふっ…もうゆたかくん、甘えん坊さんなんだからあ」

「っ!?!」

「どんだけ熟睡しとんねん！ ってかいつたいどんな夢を？  
しょうがないのでほったをつまむ。」

「ふみゆ」

と可愛らしいけど、意味不明な声を発する美咲ちゃん。  
回りの好奇心な視線も忘れて、なんか面白くなってきた。

もう一度ほったをつまむ。

「うにゆ」

つまんだまま引っぱってみる。

「ふみゆーん」

くそ！ かわいい！ でも…

「いい加減起きろ！」

美咲ちゃんの綺麗なおでこにデコピンをお見舞いしてやった！

「あつっ！」

美咲ちゃんは、おでこをさすりながら、ムクっと身体を起こす。

「美咲ちゃんおはよう」

「あ、ゆたかくんおはよう、あのね、熱々のおでんをね、おでこに  
あてられた夢見たの！」

どんな状況だよ、って夢見てたのは自覚してんだ。

「そんなことよりココがどこか分ってる？」

「え？ がっこう…学校！」

「うん、堂々と寝てたね…」

「ね、寝てないもん！」

反論する美咲ちゃんは顔が真っ赤です。

「いや…バレバレだし」

「うー」

「ところで夢の中で俺と何してた？」

「っ！？ べ、別に、な、なにもしてないよ」

と明らかに動揺して視線を逸らす。

「ふーん、俺が出てきたのは否定しないんだ？」

「っ！？ で、出てきてないもん！ ぷい！」

これ以上追求すると怒り出しそうだから、この辺にしておくか。

…

美咲ちゃんと手を繋いで帰る帰り道。

「ねえ、どんな夢見てたか教えてよ」

「だめ」

「なぜに？」

「だめだからだめ」

理由になってないし…。

「じゃあ美咲ちゃん家行って、夢と同じことする？」

「っ！？ ゆたかくんのえっち！」

えっつと…ええ？

「あれ？」

「え？」

「美咲ちゃんもしかしてえっちな夢を？」

「…っ！？」

茹蛸のように真っ赤になる美咲ちゃん。

「そっか、そうなんだ」

「ち、ちがうもん！」

「ふーん、そうなんだ、美咲ちゃんがねー」

「ゆたかくんのバカア！」

「いだあ！」

久々にグーでパンチもらいました。

## 第8話：乱入者

今日は、美咲ちゃんの家で、勉強会です。

「お茶もつてくるね」

勉強を始めて1時間くらいしたところで、美咲ちゃんが席を立った。といってもテーブルで勉強しているから、イスに座っているわけじゃないけどね。

「あ、あのダンスは開けちゃダメだからね」

美咲ちゃんはドアを開けたところで、振り返りながら言った。

「分ってるって」

例の下着が入っているとされるダンスの事だ。でもこれだけ言われると逆に開けたくなるのが人情、いや健全な男子です。

美咲ちゃんの足音が遠ざかるのを確認。

「開けますよー」

自分しか居ないけど、何か言いたくなっただけ。1番下の引き出しが下着だと思ったが、スカートが綺麗に整頓されて入っている。

下から2番目の引き出しをそっと開けると、可愛い下着が丸め



られたように  
畳まれて（？）所狭しと詰め込まれていた。

流石に手に取ったりはしないが、女の子ってこんなにいっぱい下着があるのかと、  
感心したその時、頭頂部に強烈な激痛が走った。

「いつだああ！」

「開けるなつて言ったでしょ！」

顔を茹蛸のように真っ赤にして、半分涙目の美咲ちゃんが睨んでました。

「つかお茶持ってくるの早くない？」

テーブルの上を見るとお盆に紅茶が2つとお菓子が載っていた。

「えつと……てへっ……」

つと、可愛らしく言ってみたが、美咲ちゃんの額に青筋が1本追加されただけだった。

それから小1時間ほど説教を食らいましたよ。それも正座させられて。

紅茶冷めちゃいますよー、という視線の抗議も効果ありませんでした。

紅茶を入れなおしてもらい、それを一口啜ってほっと息をついた時、ドアが勢い良く開いた。

「うおー！」「きゃあー！」

よほどビックリしたのか、美咲ちゃんが俺の胸にしがみついてきたけど、ニヤけてる暇は無い。

「美咲ー？ 私だよー」

「へ？」

恐る恐るという感じで、顔を上げて声のしたほうを見る美咲ちゃん。

「お響…」

「っていかお取り込み中だった？」

「え？」

自分の状況を確認した美咲ちゃんは、俺から勢い良く離れて、身だしなみを整える。

あのーそこで身だしなみを整えると、余計怪しまれる気がするんですけど？

「そ、そんなことより、お響、どうしてここに…」

「え？ 彼氏が出来たっておばさんに聞いてさ」

余計なことをとか、ブツブツ文句を言っている美咲ちゃんを余所に、品定めするように、遠慮の欠片もない視線で、まじまじと俺を見るお響さん。

「あ、あの、俺の顔に何か付いてますか？」

「へえ、あんたがねー」

俺の質問スルーですね…。

「な、何か？」

「バカっぽいねー」

俺の質問をスルーした拳句の暴言ですよ、泣いてもいいですか？

「ゆ、ゆたかくんは、バカっぽいけど、バカじゃないもん！」

「……」

それフォローになってない気がする。

お響さんも哀れみの眼差しで見るのやめて！　っていうか元凶あんたじゃん！

「…えっと、柳田響子です、よろしく」

場の空気を変えるように、キチンと俺に自己紹介をするお響さん、  
じゃなく響子さん。

自己主張するように突き出た2つの胸…双丘に釘付けです。

「…あ、俺、竹田豊といいます、よろしくです」

2つの双丘に向かって挨拶する俺に、横から冷たい視線が突き刺さる。

目線を合わせたら殺られると、俺の中で警鐘が鳴ってます。

「あの…響子さんは、美咲ちゃんとはどういう？」

「お響でいいよ、美咲とは中学の時の…知り合いかな」

友達じゃなく知り合い？ と疑問を感じたけど口には出さなかった。

「お響、何しに来たの？」

いつもの美咲ちゃんらしくないというか、俺以外のクラスメートと話す時のトーンに近い。

だけど、クラスメートへのそれとは何か違う感じがする。

「美咲の心を溶かしたのがどんな奴…コホン…えっと…と、殿方が確認したくてさ」

いや顔赤くするなら殿方とか言うなよ、それにいまさら気を使うなと言いたい。

「お響には、関係ないでしょ！」

こんなに怒ってる美咲ちゃんを今まで見たことが無い。

「……そうだね、関係…ないね」

お響さんは一瞬だけ悲しそうなの、というか寂しそうなの顔をした。

いったい、このぺたーんとぼいーんの間になにかあったのだろうか？

「ぺたーん言うな！」

「ぼいーん言うな！」

「いであ！」

心を読まれた拳句にダブルで拳骨食らった…  
だって、この雰囲気には耐えられなかったんだもん。

題9話：過去（前書き）

忙しくて書く暇がなかった…。

ようやく余裕が出来てきたので、ちよつとずつ執筆してました。  
美咲の過去が少し分かりますが、展開が強引かも。

## 題9話：過去

美咲ちゃんと響子さんの間に流れる、微妙な空気は耐え難いものがある。

どうしたものかとオロオロする俺を、響子さんがチラッと横目で見た。

「んじゃ、目的も達成したし、帰るわ」

「…」

美咲ちゃんは目を伏せたまま何も言わない。

「じゃあ、豊くんまたね」

「あ、はい、また」

「あ、そだ、メアド交換しよ？」

「え？ でも」

チラッと美咲ちゃんを見ると、やっぱりジト目で睨んでました。

「いいから早く携帯出す！」

「…はい」

ポケットから携帯を出すと、響子さんに奪うように持ってかれた…。赤外線通信を終えると、放り投げて返してきた。

「んじゃあね」

取り損ねた携帯が床に落ちる前に何とか捕まえて、響子さんを見ると既にそこに居なかった。

「はやっ！　ってか何だったんだ…」

ってかさつきからひんやりと冷たい視線に睨まれています。見なくても分かるほどに…。

「ねえ、ゆたかくん」

怖！　妙に優しい声が怖！

「な、なんでしよう」

「さつき胸ばっか見てたよね？」

え？　そっち？　メアド交換のほうじゃないのね…。

「み、見てません」

「…」

無言で胸倉つかまれた！

「み、見てました…」

すると美咲ちゃんはその自分の胸を押さえて考え込んでいる。



「お、大きければ良いってもんでも無いしさ」

「うん…あ！ 揉んでもらうと大きくなるって聞いたことある」

「と、都市伝説でしょ…」

「じゃあ早速ゆたかく」「却下！」

「まだ何も言っていないよー！」

「だいたい分るから！」

素晴らしい提案だけど、大人の事情でそこは却下だ！

「大人の事情って何？」

「な、なんでもないよ、それより響子さんのことなんだけど」

「お響の話はしないで！」

美咲ちゃんは、ぷいっとそっぽを向いています。

うーん、何か事情がありそうだな、今度和利にでも聞いてみるか。

その時、携帯がブルブルと振るえたので、ディスプレイを見てみると、メールだった。

タイトルを見ると『愛する豊くんへ』となっている。

ん？ 美咲ちゃん？ じゃないよなさつきから携帯なんて持ってもないし。

本文を見てみると、響子さんからだった！  
内容は告白かと思ったが、聞いて欲しいことがあるから、連絡くれ  
という内容だった。

タイトル関係ないじゃん！ つつか美咲ちゃんに見られたらヤバイ  
じゃん！

「ふーん、もうそんな仲だったんだ？」

急に耳元で声があったので、振り返るとイスに乗った美咲ちゃんが、  
後ろから携帯を覗き込んでいた。

「っ！？ ちが、違うから！ さっきの今であり得ないでしょ！」

「分ってるよ…そのくらい」

ふっと、寂しそうな表情をする美咲ちゃん。

「美咲ちゃん…？」

「な、なんでもない…」

何か勉強という雰囲気でもなくなったし、なにより美咲ちゃんの様  
子が変だ。

今日は1人にさせたほうがいいのかも知れない。

「えっと…今日はもう帰るよ」

「う、うん…ごめんね」

「別に謝まる事じゃないよ」

「じゃあまたあしたね」

バイバイと手を振って美咲ちゃんの家を出た俺は、携帯を開き、早速、響子さんにメールを入れる。

- こっちはいつでも大丈夫です

するとすぐに返信が来た。

- じゃあ今から会える？

- OKですよ

- まだ美咲ん家の近くよね？ 駅前の喫茶店にいるから。待ってるわ。チュ

うん、最後のチュは余計だな。

美咲ちゃんに見られたら、あらぬ誤解を受けるから止めて欲しい。

駅前の喫茶店つていくつもあつたらどうしようかと思っただけど、1軒しかなかった。

まだ新しい感じの店に入ると、すぐ目に付くところで響子さんが小さく手を振っていた。

「遅い！ 初デートに遅れてくるとは何事か？」

「はい？」

何言ってんだこの人は!?

「冗談よ、座って?」

「あ、はい、あ、すみませんコーヒー下さい」

水を持ってきたウェイトレスにコーヒーを注文して、響子さんの向かい側に座る。

「話したいことって美咲ちゃんのことですよね?」

「うん、美咲のことというより、美咲と私の関係についてね」

「不思議に思っていました、友達…ですよね?」

「私はそう思っているけど、美咲は違うみたい」

そう言つと響子さんはしばらく窓の外を眺めている。

そして俺はと言えばその巨大な双丘を眺めましたとも!

「美咲には…」

「え?」

不意に響子さんが話し始めた。

「美咲には、歳の離れたお兄さんが居たの」

「え!?!」

「でもねそのお兄さんは私たちが中学生の時に、事故で亡くなったの」

「そ、そうなんですか…?」

「美咲はお兄ちゃん子だったから、それはもう酷く悲しんでいたわ、葬儀が終わって学校に行くようになってからも、美咲はほとんど喋らなくなったの」

「…」

「いつも思い詰めた感じで、私や和利とも喋らなくなってしまったわ、

和利は付かず離れずの距離で見守っていたみたいだったけど…」

「けど私は当時、ずっと好きだった人と付き合い始めたばかりで、何をするのも楽しい時だった」

それは分かる気がする。

ウエイトレスが俺のコーヒーを置いて下がるの待ち、再び響子さんが口を開いた。

「本当だったら一番近くにいた友達として、美咲を支えてあげなければいけないかった、

でも、私は彼氏を優先してそれを放棄したの、ひどいと思うでしょ？」

「い、いや、それは何とも…」

「正直、私は美咲に対してどう接すればいいか分からなかった、幼

かったのね」

そう言いながら響子さんは悲しそうな顔をする。

「中学生ではしょうがないと思いますよ」

「そうね、でも美咲は見捨てられたと思ったみたい、昔は良く私の家にも遊びに来ていたけど、それも無くなったわ」

「元の関係に戻りたいと？」

「もちろんそう望むけど、どうかな？」

期待に満ちた目で見るの止めて下さい…。

「お、俺に聞かれても困るけど、昔の気持ちと今の気持ちを伝えて、そして誠心誠意謝れば許してもらえるかも知れないですね」

「そうかな？」

「はい、でも保証は出来ませんけどね」

「そうね、その時は豊くんに慰めてもらおうかな？」

そういうと腕を胸の下で組んで、胸を強調する。

えっと…これはなんのアピールですか？

「いやいやいや、それおかしいから」

「豊くんは美咲のお兄さんになんとなく似てるわね」

「え？ それって…」

お兄さんの面影を俺に見てるってこと？

「あ、でもお兄さんの面影を、あなたを見ている訳じゃないと思うから、安心して」

響子さんは俺の心を見透かしているようにフォローする。

「そう願いますね」

「豊くん」

急に真剣な口調になる響子さん。

「はい」

「美咲をちゃんと見てあげてね、私の胸ばかり見てないで」

「は、はい…」

バレてましたか…、っていうか真剣な口調で言うことか？

「そして、私と美咲の仲も取りもってね」

「ぜ、善処します」

「その時にはちゃんとお礼もするから」

そういうとまた腕を胸の下で組んで、胸を強調する。  
だからそれは、何のアピールやねん！



## 第10話：仲直り

翌日の学校からの帰り道、いつものように美咲ちゃんと手を繋いで帰る。

「ねえ、美咲ちゃん？」

「なあに？」

と可愛い顔で見上げてくる。

「あのさ、き」「お響の話はしないで！」

ぶいっとそっぽを向いてしまっけど、手は繋いだままだ。つていうか反応、早！「き」しか言っていないのに…。

「な、なんで分ったの？」

「真顔になった」

そっぽを向いたまま答える美咲ちゃん。

えっと…え？ そんなに普段ニヤけてるってこと？

少しへこみながら響子さんと1度会うように勧めてみる。

「お響の話ばかりするゆたかくんなんか嫌い！！」

美咲ちゃんは繋いでいた手を振り解き駅のほうに走って行ってしま

った。

「なんだまた痴話喧嘩か？」

「ちげーよ、っていうかまたって言うな！」

振り替えると和利が、ニヤけながら立っていた。

「今度は何だ？ イタズラでもしようとしたか？」

「イタズラって…忘れてるかも知れないけど、美咲ちゃんは同級生だからな！」

「冗談だ」

「タチの悪い冗談はやめろ…」

「それで何かあったのか？」

少し真顔になった和利へ、さきほどまでの経緯いきわづらひを話した。

「っていう訳で、説得失敗したところ」

「…」

和利は腕を組んで目を瞑り、何やら考え込んでいる。

「和利？」

「…やめとけ」

「え？」

目を開けた和利は真剣な顔で俺に言うんだ。

「変に首を突っ込むな」

「なんでだよ！」

和利は少しだけ目線を泳がせ、また視線を合わせてきた。

「美咲との関係が終わっても良いのか？」

「それは……困るけど……」

「だったらもう美咲とお響の事には関わらな」

「……」

「俺も豊たちには仲良くして貰いたいしな」

そう言うと和利は俺の肩を叩き駅のほうに歩いていった。

「本当にそれでいいのかな……」

俺の呟きは夕焼けに染まりつつある空に、静かに消えていった。

…

翌日、美咲ちゃんは学校を休んだ。

和利に聞いてみたが何も聞いていないということだった。

「どっしたもんかな」

美咲ちゃんとの関係に亀裂が入るのも嫌だけど、一つだけ気になっている事がある。

それは美咲ちゃんが響子さんのことを『お響』と呼んでいた事。

美咲ちゃんもどこかで響子さんとの関係が、元通りになる事を願っているんじゃないかと思う。

俺は授業も聞かず（いつものことだが）に作戦を考えていた。

そして思いついた作戦が「美咲ちゃんのお見舞いに行こう大作戦」だ。

…

放課後、俺と響子さんは美咲ちゃん家の前に居た。

「本当にいきなり行って大丈夫なの？」

響子さんは少し不安そうな顔で腕を組んで来た。っていつか胸を押し付けるな！

「大丈夫…な訳は無いかな」

「だったらやめない？」

「でも、こうでもしないと会ってくれないと思うよ？」

「うーん、そうだよね…」

「じゃ響子さん頑張つて！」

「ええ！？ 丸投げ？」

「…」

「ねえ、一緒に来てよー」

ぐいぐいと俺の腕を引っばる響子さん。

ぽよんぽよんと抗い難い誘惑が俺の肘に直撃してます。

「わ、わかりましたから」

「わかればよし！」

くっ！ 可愛らしいところがあると思ったら演技だったか！

美咲ちゃんのお母さんに許可を貰い、美咲ちゃんの部屋に向かう。

「美咲ちゃん、開けるよ？」

「え？ ゆ、ゆたかくん？ ちょ、ちょっとまって…」

部屋の中を走りまわる美咲ちゃんの足音が響く。  
首を傾げながら響子さんを見ると、「部屋を片してる」と小声で言  
った。

「なるほど」

まあ、元気そうなので、ほっとする。

「ど、どござい」

「開けるね」

「うん」

とりあえず俺だけ美咲ちゃんの部屋に入る。

ええ、響子さんの無言の目力で指示されました…。

「…」

「…」

昨日あんな別れかたをしたので、お互い気まずい空気が流れる。

「「あ、あの…」」

同時に同じセリフを言って二人で赤くなる。

「ゆたかくんから…」

「いやあ美咲ちゃんから…」

と二人ともモジモジしていると「ええい、付き合いだてのカップルか！」

と言いながら響子さんが乱入してきた。

「まあ付き合いだてと言えば付き合いだてだけど」

「んなあこたあどうだっていいの！」

「タモさん？」

「髪切った？ って誰がタモさんだ！」

どうやら響子さんは乗りやすい体質のようだ。

「ゆたかくんどういうこと？」

「…」

美咲ちゃんは鋭い眼差しで俺を睨む。

「出てっつて！」

「美咲ちゃん…」

「ゆたかくんもお響も出てっつて！」

「それだよ美咲ちゃん！」

「…？」

「美咲ちゃんは響子さんのことを嫌っているのに、昔の呼び名で呼んでる」

「…っ！？　そ、それは…」

「本当は美咲ちゃんも昔のような関係に戻りたいと、思っている証拠でしょ？」

「…」

俯いてしまった美咲ちゃんから、響子さんに視線を移し合図を送る。

一瞬（？）な表情をしたけど、すぐに察したようだ。

「美咲！　ごめん、ごめんなさい！」

美咲ちゃんの前で土下座をする響子さん。

「…」

「美咲がづらい時に傍にいてあげられなくて…でもね…」

「待って！」

「え？」

「わたしはそんなこと気にしてない！」



「？」

「なんで彼氏が出来た事言ってくれなかったの!？」

え？ そつち？

「確かに最初は、なんでお響が傍にいてくれないのか恨んだけど、和くんから彼氏が出来たらしいと聞いて恨みは晴れた。だってお響の幸せを奪う権利はわたしには無いから、それに……」

「それに？」

「…お響が幸せならわたしも幸せだと思ったから」

すると響子さんは美咲ちゃんに抱きついて泣き始めた。

「うう、ごめん美咲、今度彼氏が出来たときには真つ先に報告するからね」

俺はそこまで見届けて美咲ちゃんの部屋を出た。

女どうし積もる話もあるだろうから今日はもう帰ろう。

自宅に着くと携帯にメールが2通入っていた。

1通は美咲ちゃんから

- ゆたかくん、今日はありがとう、それと嫌いって言っでごめんね(はあと

もう一通は響子さんから

・ ありがとー！ 見た目バカっぽいけどやる時はやるね！（はあと  
うん、泣いていいよね？ っていうか美咲ちゃんの送ったメール見  
てから送ってるよね？

でも…実質俺って何もしてないような…。まいつか。

…

今日もまた、美咲ちゃんの家で、勉強会です。

「美咲ちゃん、ここ分かんないんだけど」

「ううんはね…」

その時いきなりドアが勢い良く開いた。

「うおー！」「きゃあー！」

美咲ちゃんが俺の胸にしがみついてきた。

「あたしだー」

見ると巨乳…響子さんが悪びれもせず、ニカーッと笑ってた。

「もう、お響！ 脅かさないですよ！」

「うん、まあ、ごめん、っていつかご馳走様」

「え？」

自分の状況を確認した美咲ちゃんは、俺から勢い良く離れて、身だしなみを整える。

「それより、お響、今日遊ぶ約束してたっけ？」

「いんや、うちの両親が旅行に行ったお土産を持ってきたついで」

「えつと…響子さん？ その登場の仕方、やめてもらえませんか？」

美咲ちゃんに抱き疲れるのは嬉しいけど、心臓に良くないんで。

「じゃあ、用も済んだし帰るわ」

ええ！？ 無視ですか！？

## 第11話：プールへGO！

「あ、そうだ、豊くんコレ2人で使って」

とって響子さんは俺に何かを握らせてきた。

「？」と思いきと手の平を開いてみると、3つ連なった

「コンド…！」

慌てて口を押さえ美咲ちゃんを見ると「今度なに？」とキョトンと  
している。

「こ、今度、プール行こうよ！」

「え？ あ！ お響がくれたのってウォータープールの入場券？」

「そ、そうそう！」

ウォータープールは最近隣町にできたレジャー型のプールだ。

ウォーターってプールなんだから当たり前じゃん…。

んで何とかゴマかせたけど、響子さんなんてもの渡してくれてんだ！  
見回すと響子さんはもう居なかった…。このパターン多くない？

響子さんにメールで抗議をしてみる。

- なんすか！？ コレは？ -

- はやっ！ もう使ったの？ -

- 使うか! -

- 駅前で配ってたから豊くんたちには必要だと思ってもらった -

はあ…、もうため息しかでない。

「ゆたかくん誰とメールしてるの?」

ちょっと不機嫌そうに口を尖らせている美咲ちゃん。

「あ、えっと…、き、響子さんにお礼のメールだよ」

「そっかー、私からもありがとっって伝えて」

「う、うん」

伝えられるか!

…

ウォータープール当日、待ち合わせ場所には美咲ちゃん、響子さん、かな、俺の4人が居た。

「で、なんでお響たちまで居るの?」

ジト目で俺を見上げつつ睨む。

上目使いの威力をジト目で相殺しちゃってる!

「さ、さあ、俺に聞かれても……」

「あ、私はかなちゃんと来ただけだから、ねー」

「そうだぞ、にーちゃんたちの邪魔をしに、邪魔はしないから！」  
今本音ちよつと漏れたよね？

「そ、それより早く行こうよ」

響子さんはちよつと焦っているけど、もう遅いから！

そしてなぜか俺がみんなの入場料を払う事になった。

「高校生2人、子供2人…痛っ！」

美咲ちゃんが足を思い切り踏んできた。

「こ、高校生3人、子供1人」

かなが足を踏みに来たけど、華麗に避けてやった。

「むう！ にーちゃんのいくじなし！」

なにか！？

涙目で見上げてくるが、おまえは正真正銘の子供だから！

「んじゃ、あとでねー」

水着に着替えるため、男女に分かれて更衣室に向かう。  
俺の後ろに着いてきたかなを、美咲ちゃんと響子さんが連行していった。

…

待つこと20分、ようやく女性陣たちが水着に着替えてきた。  
水着に着替えるだけで時間かかりすぎじゃない？

美咲ちゃんとかは大人しいデザインのワンピースで体型はほとんど変わらない。

響子さんは派手なビキニを着て、無駄に迫力のあるボディを披露している。

なんか姉と妹とプールに来ている気分だ、響子さんは同い年だけだね。

「なんか今すごい失礼なこと言われた気がしたんだけど？」

「き、きのせいっすよー！」

っていうか胸を押し付けるな！ 水着じゃいろいろ隠せないじゃないか！ いろいろってなんだ？

「おい、みさきち、どっちが先にプールに着くか勝負だ！」

「望むところよ！ って誰がみさきちだ！」

と言って2人は猛ダツシユで走って行った。

「おーいそつちは…」

子供用プールって言おうとしたけど遅かった。

「はあ、はあ、ま、負けた」

子供用プールに着くと、美咲ちゃんが肩で息をしながら頂垂れていた。

つてというか高校生が小学生に負けるなよ…。

「まあ、みさきちもがんばったと思うよ？」

「…なっ！」

「ふふん、しょうしゃのよゆうだよ」

「勝者も余裕も書けない子供に負けるなんて…」

そこでハタと何かに気付く美咲ちゃん。

「ゆたかくん行こう」

と言って俺の手を引いていく。



「あ！ ずるいかなもいく！」

「だめだよ、かなきちはお響と来たんでしょ？」

「…っ！」

かなきちって語呂悪！ っっていうか大人げない！

ぎゃーぎゃー騒ぐ美咲ちゃんとかなを尻目に、響子さんが

「じゃあ私と波のプール行かない？ ポロリもあるよ？」と無駄に  
でかい胸を強調する。

「ポロリあるの！？」

ごきゅっと生唾を飲むと美咲ちゃんとかながジト目で睨んでた！

「ツ、ツルリもいるよ、なんちゃって…痛っ！」

今度は美咲ちゃんとかなの2人に、同時に左右の足踏まれた！

「ちゃんと生えてるもん！」

と頬を膨らます美咲ちゃん。どこの話だ！

「かなはツルツ」「はい、危険な発言ストップね！」

そんなこんなでようやく美咲ちゃんと2人で流れるプールにいた。

「ねえ私たち恋人に見えてるかな？」

「兄妹にしか見えないわね、それか幼女好きの変態？」

いきなり真後ろから響子さんの声がした。

「変態言つな！　っっていうかうしろに居たんかい！」

「ゆたかくんは幼女好きじゃないもん！」

え？　美咲ちゃんがそれ言つの？

「そつだよね？」

「う、うん、そ、そつだね」

滅多なこととは言えません。後が怖いので…。

「幼女つて美咲のことなんだけど？」

響子さんが意外そうな顔で、冷静にツッコむ。ってそこはもうちょっとテンション上げようよ！

「…なっ！？　誰が幼女だ！　このお色気ボディのどこが幼女か！」

お色気つて…。　そう思ったとき、美咲ちゃんがギロリと一瞬睨んだ。怖っ！

「どっがっつて…」の辺とか

「ひゃっ…」

「あそこ辺とか」

「ひゃあ！ いちいち触るな！」

えっと…どこを触っているかは、プールに反射する太陽の光で見えなかった。ことにしておこう。

## 最終話：近い未来（前書き）

最終話です、本当は前回で終わらせる予定でしたが、ちよっとだけ延ばしました。

## 最終話：近い未来

「ねえ、あれもう使った？」

結局みんなでひとしきり遊んで休憩している時、不意に響子さんが言った。

チラッと美咲ちゃんを見ると、かなと楽しそうに話してる。

「俺たちまだそんな関係じゃないっすよ」

「相手が幼児体型の美咲じゃ、する気にならない？」

なぜか響子さんは無駄にデカイ胸を揺らすので、手のやり場に…もとい目のやり場に困る。

「そういうことじゃないですけどね」

「え？ まさか豊くんにペド…の趣味が？」

「それはない！ 忘れているかもしれませんが、美咲ちゃんは高校生ですから」

「…そうだった、かなちゃんと話しているのを見ると、つい忘れちゃうんだよね」

うん、背格好もだいたい一緒だし、かなと同年に見えても仕方ないか。

「まあいずれ2人の気持ちが盛り上がったら、自然となるようになる

ると思います」

このままどんどん距離が近づいて行けば、健康な男女ならいつかそうなるでしょ。

「その時はちゃんと使つてよ？」

「何を？」

「んな！ そんなエロい事を私に言わせる気か！」

「ええ！？？」

エロい事ではないと思うが、渡してきた本人が何言っちゃってるの？

「も、もちろんその時は使いますよ」

「美咲を傷つけたら、分ってるよね？」

と言つて響子さんは腕で俺の首をホルドするが、巨大な肉の塊りが目前に広がる。

「分ってます！ っていうか胸が！ 胸があああ！」

「あ、それ知ってるラ ユタでしょ？」

「違う！」

「なにお響の胸に顔うずめてるの！」

「それも違う！」

「つてというか地味に腕をつねるのやめてえ！ 手がちっちゃくて余計痛い！」

「きゅ、休憩終わり！」

「あー誤魔化した！」

「今の話をここで追求されたら困るし、かなもいるし、誤魔化すしかないっしょ。」

「美咲ちゃん、あれに乗ろう！」

「指差したのは、2人乗りの浮き輪で滑るウォーターライダー。『ウォーターライダー？』って最後のハテナはなんやねん…。」

「かなも乗りたい！」

「かなちゃんは私と乗ろうねー」

「むー…」

「かなはしびしびといった感じで響子さんと手をつないで歩いていく。」

…

「さほど待つこともなくウォーターライダーに乗る順番が来た。」

バランスの問題もあり、美咲ちゃんが前で俺が後ろに乗る。

その時まで気付かなかったが、2人で浮き輪に乗ると、ほとんどぴたりとくっつくような感じだ。

「ひゃう！ ゆたかくんあんまりくっ付かないで…」

「そ、そんなこと言われても…ちょっとだから我慢して」

「う、うん」

「準備よろしいですか？」

無駄にスタイルの良い係員のお姉さんが、胸を揺らしながら確認してくれる。

「はい、お願いします」

係員のお姉さんは無駄にデカイ胸を揺らしながらボートを力いっぱい押した。

胸を強調しているのは特に深い意味は無いですよ？ いやまじで。

「にやあああああああ！！！」

ボートが滑り始めた途端、美咲ちゃんが尻尾を踏まれた猫のような声で鳴いた、もとい叫んだ。

美咲ちゃんの体がグイグイ俺に押されてきて、柔らかい感触とかいろいろヤバいです。

最後はやはりお約束のように転覆しましたよ。



ぜんぜん深くないが、水の中で美咲ちゃんをキャッチして水面に出る。

「ゆたかくん…?」

「うん? 何? 美咲ちゃん」

「あのね、手がね…」

「手?」

美咲ちゃんの手を見るが、特に気になるところは無い。んで俺の手は…。

「ぬうおおおう! し、しめん」

思わず胸を掴んでいたみたい、まあ掴むほど無いんですけどね。

「あ、あるもん!」

俺の心を読んで、頬を膨らます美咲ちゃんは天使のようにかわいいね。

「おだててももう遅い!」

「すみません」

頼むから心を読まないで欲しい。

ウォータースライダーのプールサイドで、待つこと数分で響子さん達が降りてきた。

響子さんの胸の揺れは堪能できたが、ポロリは無かった。

「ちえ…」

美咲ちゃんに物凄い目で睨まれた。

…

夕焼けに染まる街を、美咲ちゃんと手を繋いで帰る。響子さんは半分寝ているかなを連れて先に帰った。

「ねえゆたかくん休憩の時、お響と楽しそうに何を話してたの？」

「え？ それは…」

あれが楽しそうに見えたのか…。まあ最後は少し嬉しかったが。

「浮気の相談だ！」

「違う！」

「じゃあ何？」

美咲ちゃんはジト目ですぐそばまで顔を近づけてくる、っていうか近いし！

「み、美咲ちゃんのことだよ」

「私のこと？」

「そそ」

「お響のことだからろくな話じゃないんでしょう？」

当たってる！ っていつか誰でも当てられるか…。

「うーん、いつか話してあげるよ、たぶんそんなに先じゃないと思うから」

「…」

美咲ちゃんはじいっと俺の顔を見つめてから、ため息をつく。

「うん、ゆたかくんを信じてるもん、その時まで待ってる！」

夕焼けに伸びる2つの影が1度だけぴったりとくっ付いてすぐ離れ、また手を繋いで歩き出した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3631/>

---

硬派な彼女

2011年10月11日11時59分発行